

十津川警部 海の挽歌

NISHIMURA KYÔTARÔ

西村京太郎





HARUKI NOVELS

と つ が わ け い ふ う み ば ん か
十津川警部 海の挽歌

15

1-1

著者

にしむらきょうたろう

西村京太郎

1998年8月8日第一刷発行

1998年8月28日第三刷発行

発行者——— 角川春樹

発行所——— 株式会社角川春樹事務所

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-27二葉第1ビル

電話——— 03(3263)5247(編集)

03(3263)5881(営業)

印刷・製本——— 中央精版印刷株式会社

フォーマット・—— 芦澤泰偉
デザイン

シンボルマーク—— 西口司郎

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁はお取り替えいたします。

ISBN4-89456-217-0 C0293

©1998 Kyôtarô Nishimura Printed in Japan

十津川警部 海の挽歌

NISHIMURA KYÔTARÔ

西村京太郎



米軍の支配下にある沖縄の小さな無人島で、白骨が五体発見された。

発見者である中央新聞の記者田島が、

友人である十津川警部に白骨の調査を依頼したところ、

それは戦時中のもものではなく、一年から一年半前のものだという。

さらに中央新聞の那覇支局長の丹羽雄二が

東京で死体となつて発見され、事件は思わぬ方向へ進展する。

一見不可能にみえる東京と沖縄間の犯罪に、

十津川警部の推理は果たして……。

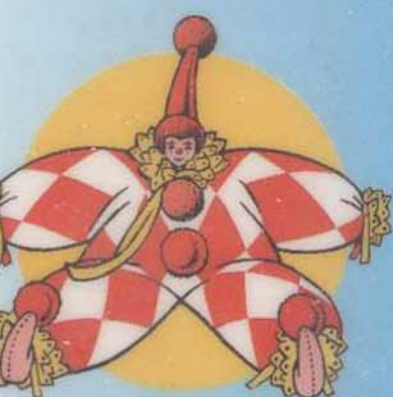


1920293007625

ISBN4-89456-217-0

C0293 ¥762E

定価 本体762円 +税



ARUKI NOVELS

ハルキ・ノベルス

① 十津川警部 海の挽歌

1-1 西村京太郎

十津川警部 海の挽歌

西村京太郎

角川春樹事務所

目次

第一章 ニライカナイの海

7

第二章 ホテルK

43

第三章 ヤマネコの島

78

第四章 四ツ葉のクローバー

108

第五章 夏の海

175

第六章 海の挽歌

207

第一章 ニライカナイの海

1

田島は大学時代の親友である、警視庁捜査一課の十津川^{とつがわ}警部と一緒に行くつもりだったのだが、十津川が、十日夜に起きた殺人事件の捜査のために、行かれなくなってしまったのである。

現職の刑事とつき合っていると、こんなことは、ありがちと、田島は、覚悟していた。もっとも、十津川の方だって、新聞記者とつき合っていれば——と、思っているかも知れない。

中央新聞の社会部記者、田島^{たじま}は、五月十一日、石垣島行JTA（日本トランスオーション航空）の071便に乗った。

東京発午前六時四五分、石垣着一〇時一五分である。

仕事ではなく、個人的な旅行だった。

ともかく、田島の沖縄行は、ひとり旅になった。今回の旅行には、二つの目的、というか、二つの楽しみがあった。

一つは、石垣で牧志明^{まさしあきら}に会えること。もう一つは、沖縄の古い祭祀^{さいし}を見られることだった。

牧志は、昭和五年の生れで、ひょうんなことから、

田島の働く中央新聞に、戦前戦後の石垣島や、沖縄

全体の話連載することになり、まとめて、それが本になった。

その本も、中央新聞で出版し、その関係で、田島は何回か、牧志に会っている。

石垣で二回、その他は、東京である。

ここ三年ほど、会っていなくて、手紙だけの交流になってしまっていた。

従って、三年ぶりに会うことになる。

祭祀の方は、石垣島から東南に舟で一時間近く行ったところに浮ぶ無人島のことだった。

その島の名前は、赤見島^{あかみしま}。シツイの島とも呼ばれている。

シツイというのは節祭のことで、石垣に伝わる農業に関する儀礼のことである。

昔から、沖縄、奄美^{あまみ}を含む八重山には、ニライカナイ信仰というのがある。

これは、ニライカナイと呼ばれる神の国が、はるか遠い海の彼方にあり、そこから、季節の折り目に、神の国の使者がやってきて、島々の村を訪ね、健康や長寿、或いは、豊作、豊漁を授けてくれるという信仰である。

今でも、八重山諸島では、その信仰が、根強く生きています。

小さな無人島、赤見島がシツイの島と呼ばれるのは、ニライカナイからの使者が、石垣島に来る途中、その島で、休息を取ると、伝えられているからだっ

た。従って、戦前は、毎年、南寄りの季節風（夏至南風^{カーチバ}）の時期になると、赤見島には、祭壇が設けられ、ニライカナイからの使者に、ゆっくり休んで貰う^{もら}儀式が行われた。

ところが、戦後、アメリカ軍の沖縄占領によって、それが、出来なくなった。

赤見島に、米軍の施設はない。

ただ、アメリカ軍は、この孤島を、艦載機かんさいきの射爆訓練に使用してきたのである。そのため、島民が立ち寄ることが許されなかった。

石垣の人々は、赤見島の返還をアメリカ軍に要求した。信仰のための返還要求というのは、珍しかったろうが、アメリカ軍から、オーケイの返事はなかった。

日本政府も、沖縄本島の基地については、熱心だが、赤見島のような無人島については、全く、無関心だった。

「それならば、夏至南風カーチバイ（四月―九月）の季節の中で、二日でも、三日でもいいから、島で、祭祀だけ

でもやらせて欲しいと、いつているんですがねえ」と、牧志は、電話で、いったことがある。

一瞬、許可されそうになったが、湾岸戦争が、起きて、駄目になってしまった。

それが、今年の五月になって、

「やっと、十二日と十三日の二日間、あの島で、儀式が行われることになりました」

と、嬉しうれそうに、電話してきたのである。

「ここ一年、アメリカ軍は、艦載機の訓練を、赤見島で、行っていないからね。多分、アメリカ軍は、あの島の存在自体、忘れてしまっていると思いますよ」

と、牧志は、いう。

「それでも、島は、返還されないんですか？」と、田島は、きいてみた。

「軍隊というのは、アメリカだって、官僚機構の杖^{つえ}みたいなものですからね。一つの無人島の返還だって、本国の許可だとか、書類をいくつも作成するか、手続きが、大変なんじゃありませんかねえ」

牧志は、電話の向うで笑った。大きな笑い声を立てる男なのだ。

「それにしても、よく、二日間、島に渡ることが、許可されましたね」

田島が、いうと、牧志は、また笑った。

「半分は、強行上陸ですよ。いつまでも、ニライカナイの使者の休息する場所が無いのでは、大変ですからね」

「大丈夫ですか？」

「今もいったように、アメリカ軍は、ここ一年、全く、使っていないんだから、大丈夫でしょう」

楽観的なところも、牧志らしかった。

それで、田島は、赤見島へも、行くことにしたのである。

2

石垣島は、日本で、もっとも早く三月に、海開きが行われる島である。

田島の乗ったジェット機が、石垣空港に着いたのは、予定より、十二分おくれていた。

八重山諸島は、すでに、梅雨に入っているので、天気を心配していたのだが、石垣の空は、真夏のそののように、青く晴れ、強烈な陽差しが、滑走路に照りつけていた。

空港には、牧志夫妻が、迎えに来てくれていた。

夫妻とは、三年ぶりの再会である。

といって、ぺちやくちやお喋りしゃべをする事もない。

牧志は、ニコニコ笑って、握手をし、妻の有里の運転する車で、川平かわびらにある二人の家に向った。

昭和三十年に、島を一周する道路が完成したので、車で移動するのは、楽になった。

空港の反対側にある川平に着く。

川平湾は、いつもの美しさを見せていた。

牧志は、地元の間人なので、川平湾を、キフワンナトウと、呼ぶ。

長さ二五〇〇メートルの深い湾だが、これが、潮が引くと、一〇〇メートルと狭くなる。それだけ、潮の流れが早く、危険なので、川平湾での遊泳は禁止である。

牧志の家は、川平湾を見下す高台にある。別に、

広くはないのだが、彼の家は、すぐわかる。庭の手入れを全くしていないので、雑草はおい茂り、樹々は、小さな密林になっているからである。

「川平湾キフワンナトウに、黒真珠の養殖場が出来たら、グラスボートが就行したり、道路は舗装、空港にはジェット機、どんどん、島が人工的になっていく。そんな中で、わが家だけは自然一杯にと、思っているんですよ」

と、牧志は、笑う。

そのせいで、彼の家には鳥が、よく集ってくる。

「ついでに、野良猫も、集ってきますよ。賑にぎやかなものです」

牧志のいう通り、彼の家に泊ると、朝は、何十羽とも知れないヒヨドリヒヨドリの声で、眼をさまされ、午後になると野良猫の鳴き声が、やかましい。

「おたくだけ、草ぼうぼうで、樹の手入れもしていないということ、文句が出ませんか？」

と、田島がきくと、牧志は、また、笑って、

「今のところ、出ませんねえ。私は一匹^{いっぴき}狼^{おおかみ}で、すぐ噛^かみつくから、怖^{こわ}がっているんだと思います」

その日の夕食は、牧志が作ってくれた。

左指で、器用に郷土料理を作る。指が太いのは、彼が戦後、肉体労働についているからで、器用なのは、彼が陶芸をやっているからだろ。

豚肉を角切りにして、醬油^{しょうゆ}で煮込んだラフティ。

魚のカサゴを使ったから揚げ。

野菜のチャンプル。

それに、ジューシー（炊き込みご飯）。

チャンプルーというのは、長崎というチャンポン

と同じ意味で、まぜこぜのことである。

夕食のあと、問題の赤見島について、田島は、牧志夫妻と、話し合った。

アメリカ軍の命令で、上陸も、写真撮影も禁止されているので、夫妻は、船で近づき、覚えて来て、妻の阿里が、絵に描いたという。

阿里は、画家だから、適確に、現在の島の姿を見ている。

「この島は、東南に、ご覧のような砂浜があります」

と、牧志は、その絵を見せて、

「白い、きれいな砂浜で、いわゆるコーラルサンドです。ニライカナイから、やってきた使者は、この砂浜から上陸して、島の中央部の盆地で、休息をとると、信じられているんです。それは、島にある山です」

「ああ、山が一つ描かれていますね」

す」

「標高は、二〇〇メートル足らずですが、小さい島

「ミサイルの標的にいいと——？」

では、高く見えます。これは、余談ですが、私が、

「よくわかりますね」

川平を好きな理由の一つは、ここには、五つの御嶽

「この山は、もともと、尖^{とが}っていたんでしょう？

があることなんです。信仰の中心でしてね。石垣

山頂が崩れているのは、ミサイルが射ち込まれたん

では、オンといって、群^{ユフシイ}星オン、山川^{ヤマ}オン、宮島^{ミヤジマ}オ

じゃないかなと、思いましたね」

ン、底^{ソコ}地オン、浜^{ハマ}崎オンの五つです。赤見島のこの

「そうなんです。ミサイルを何発も射ち込まれて、

山も、赤見オンと呼ばれていました。地形的に、こ

山が変容してしまったんです」

の島は、ニライカナイ信仰の的になる運命だったん

と、牧志は、いった。

だ、と思います。ただ、悲しいことに、この地形

が、アメリカ軍に眼をつけられてしまったんです。

翌日は、うす曇りだったが、海は、おだやかだっ

艦載機の射爆場として、最適ということだね。無人

た。

島で、石垣島からも、沖縄本島からも離れている。

赤見島へ行くための二隻の舟が、用意された。サ

それに、砂浜がある。これは、上陸する海兵隊の援

バニと呼ばれるくり舟に、エンジンをつけたもので、

護訓練に、最適ということです。そして、この山で

海^{ウミンチュ}婦が一人ずつ、乗ってくれる。

一隻には、田島と、牧志が乗った。

もう一隻、大型のサバニの方には、アカマタ、クロマタの仮面をかぶった男二人と、昔から、呪術じゆじゆつの力を持つと信じられている老女三人が、乗り込んだ。アカマタ、クロマタは、石垣島に伝わる信仰で、ニライカナイからやってくる神の化身（人神）である。

また、島が、密林化していることも考えて、二隻のサバニには、ナタも積み込まれた。

二隻のサバニは、昼前に、川平湾を出発した。

環礁ソリーフを出ると、さすがに、波は強くなる。田島は、もともと、舟に弱い方なのだが、これから行く赤見島のこと、興奮して、酔いを忘れていた。

四十分も、走ったあと、前方に、島影が、見えてきた。

半円を描くように廻ると、絵で見た白い砂浜が、見えてきた。

島は、静かで、艦載機の爆音は、全く聞こえて来ない。ここ一年、アメリカ軍が、ここで訓練をやっていないというのは、本当なのだろう。

サバニを砂浜に乗りあげ、田島たちは、上陸した。砂浜には、立札があつて、それには、アメリカ軍の名前で、「この島への上陸と、撮影を禁止する」と、英語と、日本語で、並記されていた。

その鉄製の立札も、海からの風で、赤茶色に、錆びさびていた。

きれいな白い砂浜には、ところどころに、艦載機が訓練で落した機銃弾の薬莢やつきょうや、不発弾が、散らばっている。

田島たちは、アカマタ、クロマタの二人の男を砂

浜に残して、島の奥に向って、進んで行った。

牧志が、予想した通り、一步島内に踏み込むと、密林状態になっていた。

神を迎えるための祭壇を作らなければならない。

男たちは、二人の海婦ウミンチュも含めて、全員が、ナタを振って、祭壇作りに、取りかかった。

一時間、二時間と、田島たち四人は、ナタを振る続けた。

少しずつ、整地が広がっていく。

浜からの道と、祭壇のための地面が出来あがると、その地面に、女たちが、持って来たゴザを敷き、祭壇を作っていく。

やがて、女たちが、ニライカナイの神を迎えるための歌を唄い始める。それが合図になって、砂浜から、アカマタ、クロマタというニライカナイの神に

扮した二人の男が、切り開いた道を通して、祭壇にやってくる。

田島は、何枚か写真を撮ってから、牧志に、

「ちょっと、島内を見て来ます」

「不発弾があるから、注意して下さい」

「大丈夫です。気になることがあるので、それを調べてみたいのです」

と、田島は、いった。

「どんなことですか？」

牧志が、興味を覚えたという顔で、きく。

「さっき、ナタで、密林を切り開いていたでしょう。

その時、一メートルぐらいの幅で、密林のうすい場所が奥に向って続いているのに、気がついたんです。

明らかに、以前、誰かが、道を作ったんですよ」

「それは、私も、気付いていました。多分、アメリ